



大橋賢一

(BBIジャパン・センター・オーストラリア)

諸澤良幸

Morrow World)



新旧対談・オーストラリアの留学業界 「留学エージェントの役割の変遷」

インターネットやスマートフォンの発達と共に、留学エージェントに求められる役割は、かつて主流だった 海外生活のサポートだけではなくなりつつある。国際舞台で活躍できる日本人の育成を目的とする 「海外での職場経験プログラム」を展開するBBIジャパン・センター・オーストラリア (以下、ジャパセン) 代表の大橋賢一氏と、現在トレンドであるフィリピン留学をオーストラリア国内で唯一専門的に提供するMorrow World代表の諸澤良幸氏。 両氏にオーストラリアでビジネスを立ち上げた経緯から、今後留学エージェントに求められる役割に至るまで話を伺った。

文・構成=木下かをり、写真=クラークさとこ

人材を育てていくための、僕らは水先案内人

大橋賢一

(BBIジャパン・センター・オーストラリア) おおはしけんいち/ニュージーランド、オーストラ

リアでの生活を経て、日本でオーストラリア系の ビザ・人材・留学会社に転職。その後再び来豪し 2004年Big Bridge Internationalをオーストラリ アと日本で設立。留学生のサポートを行うジャパ ン・センター・オーストラリア (Web: japancentreau.com) では、グローバル人材育成に向けて英語 環境での職場経験プログラム事業などを実施。



オーストラリアでの起業

オーストラリアでビジネスを展開され ているお2人にお聞きしたいのですが、そ もそも来豪したきっかけは何でしたか。

大橋賢一(以下、大橋):来豪前、大手旅 行会社で営業の仕事をしていましたが、お 客様と接する機会も多く国内外で添乗員 もしていました。その当時は英語を全然話 せなかったのですが、お客様から頼られる こともよくあったので、何とかしなければい けないという気持ちがありましたね。

その会社で5年ほど働いた後に"世界を 股に掛ける男になりたい(笑)"という思い から、英語もしっかり学びたいと考えまし た。当時オーストラリアのワーキング・ホリ デー制度は25歳までで、その時28歳だっ た私には同制度でオーストラリアに行ける 選択肢がなかったので、まずはニュージー ランドに学生ビザで行き、その後ワーキン グ・ホリデー・ビザで働きました。日系の旅 行会社のオークランド支店で働いた後、 豪・NZ系旅行会社で働きました。そこでは 1人の上司だけが日本人という環境でした が、その時に苦労をした経験が今に良い形 でつながっていると思います。

旅行業界を転々とした後、オーストラリア の永住権を取得できたので来豪しました。 オーストラリアという国については、暖かそ うで良いな、にぎわっていそうで良いなとい う感覚でしたね。

諸澤良幸氏(以下、諸澤):日本では、大 手レジャー・アミューズメントの会社で約4 年間、営業から人材育成の業務を幅広く 携わり働いていました。就職した当時は、 海外に対する関心は全くなかったのです が、ある旅行をきっかけに英語を学ぶこと が、海外の人たちの価値観や文化、宗教 を学ぶために大切なツールだと実感したん

またその当時、高校1年生だったいとこ がオーストラリアの高校に通っていたことも あり、オーストラリアを身近に感じたため、

来豪することを決めました。

-なぜオーストラリアで、留学エージェン トを立ち上げたのでしょうか。

大橋:日本で働いていたころ、株式会社 を立ち上げたいという思いがあったのです が、会社設立に1,000万円の資本金が必 要でした。しかし資本金が足りず悩んでい た時に、先にオーストラリアで会社を立ち 上げ、その後日本で立ち上げることで両国 で株式会社を設立できることを知りまし た。また、日本に帰国した際に転職した人 材会社がオーストラリア系で、留学も取り 扱っていたことがきっかけで留学エージェ ントを立ち上げることを考えました。

その人材会社は留学業の中でも「日本 語教師を海外に派遣をする」という日本人 であることを生かしたインターンシップ・プ ログラムを主に扱っていました。日本語教 師、日本語アシスタント教師は日本人であ ることが望ましいです。その会社で働く中 で、そもそも自分自身が海外生活をする上 で何ができるかを考えた時に特別なスキ ルがありませんでした。では何ができるの かと考え、「俺は日本人だ」という根本的な 所にたどり着いたのです(笑)。

日本人は海外の人びとから評価される ポテンシャルを持っていますが、その反 面、伝える力やリーダーシップを取ることを 苦手としているのも事実です。このスキルを 身に着けることによって、世界でも日本で も国際人として活躍できるのではないかと 考え、そういった人材を育てるためのビジ ネスをしたいと思い、現在のエージェント の立ち上げに至ります。オーストラリアは、 日本語学習者数が世界第4位と多く、優れ た日本語教育環境を持つ国でもあるので、 この国をベースにしています。

諸澤:私の場合、家族が起業家一家だっ たんです。祖父が会社経営をしていて自分 も経営者になることを夢見ていました。ま た弟が会社を立ち上げたこともあり、ビジ ネスを始めたいと考えていました。

ただその時に、国内で自分が関心を持

てたビジネスがなかったことと、海外で新 しい価値観に触れることが何かのヒント になるかもしれないと思ったことから今に 至っています。最初はオーストラリアではな く、留学していた友人の薦めがきっかけで フィリピンに3カ月ほど滞在しました。フィ リピンで授業を受けた時、この価格でこん なに勉強ができるのかと、コスト・パフォー マンスの高い留学に圧倒されました。ま た、3カ月の滞在で英語が全く話せなかっ た自分が言いたいことを発言できるように なりました。

その後、ワーキング・ホリデーでオースト ラリアに渡り、「Masuya Group」で採用 して頂き、ホール・マネージャーを任せて もらえることになりました。7割が現地ス タッフ、残りの3割が日本人という環境の 中で、英語の壁や、いろいろな苦悩があり ましたね。例えば、各店舗の店長が集まる ミーティングでも、英語でのプレゼンがほ とんどできず、5分で終わるという経験も しました。

そんな日々を過ごし、セカンド・ビザのた めに、タスマニアのファームへ行きました。 セカンド・ビザの取得後は、再度フィリピン へ渡ろうと思ったのですが、オーストラリ アからフィリピンの留学をしっかり扱って いるエージェントが1社もなく、日本オフィ スのエージェントとやり取りをするしかあ りませんでした。そこで、そういったサービ スを提供するエージェントを自分自身の力 で立ち上げられるのではないかと考えた んです。

フィリピン留学の費用は、授業料、滞在 先、1日3食の食事、ハウス・キーピング、ク リーニングなどが全て含まれて1カ月当たり 12万円くらいから、1人部屋でも20万円程 度。1日の半分以上の授業がマンツーマン で、勉強だけに集中できる環境が用意され ています。このフィリピン留学という選択肢 をオーストラリア国内にいて、英語に悩ん でいる人やスキル・アップを目指したいと考 えている多くの人に広めたいと思い、今の 留学エージェントを立ち上げました。

–諸澤さんにお聞きしたいのですが、 フィリピン留学を希望される方はどういっ た理由が多いのですか。

諸澤:フィリピン留学について元々詳しい 方が多いですね。周りの経験が口をそろ えて「良かった」と言うことが多いようで、 良いイメージを持って来られる方が多いよ うに感じます。その理由として、コスト・パ フォーマンスが良い、短期間で英語がしっ かりと勉強できる、マンツーマンの授業体 制、環境が整っているなど、英語を本気で 勉強したいと思っている人たちへの条件が しっかりそろっているからだと思います。

日本では経験できない体験ができるの も魅力で、児童養護施設への訪問や、ゴ ミ山や海に行きマングローブの植林ボラン ティアをするなどの社会貢献もできる。フィ リピンは、自分自身の価値観を変える1つ のきっかけとなる場所だと思います。開発 途上国の文化を知るとことができるのも、 大きなポイントではないでしょうか。

世界で求められる国際人になるために

−ジャパセン 「日本語教師海外派遣プ ログラム」、モローワールド「オーストラリ アからフィリピン留学」とそれぞれ特化し た分野をお持ちですが、共通項として「国 際舞台で活躍できる日本人の育成」、つま り国際人になることを見据えたサービスを 提供しているように感じます。「国際人」と は、どういった人物であると考えますか。

大橋:言語を操れる人であることはもちろん ですが、そこが重要というよりも外国人の物 の考え方や仕事の仕方を知っている、それ に加えて日本人のアイデンティティーをしっ かりと持っている人であることが国際人とし ての条件ではないかと思っています。

諸澤: その点については同感です。 ただ単 に外国語ができるというわけではなくて、 それはツールであり、自国以外の人たちが 考えることを同じような目線で考えられる



ノグリー精神を持てる機会の1つが海外、そして留学

諸澤良幸

(Morrow World Inc.)

もろさわよしゆき/大学卒業後、日本最大のレ ジャー・アミューズメント会社に就職。フィリピ ンでの3カ月の語学留学の後に来豪。シドニー の飲食店グループのマネージャーや過去フィ リピン在住の経験を生かし、オーストラリア国 内で唯一フィリピン留学を専門的に提供する エージェント「Morrow World Inc.」(Web: tabiken.com)を2015年に設立。

将来のキャリアに向けた場を提供するのが、新しいエージェントの形

ことが重要だと思います。初めて海外を訪 れる人にありがちなのが、自分と異なる考 えを持つ人びとを自分と違うからという理 由で引いて見てしまうこと。いろいろな人 がいる中で、それを柔軟に受け入れ、共感 できることが大切です。このスキルがあれ ば国際人であるというようなものはありま せんね。

大橋:本当にその通りだと思います。コミュ ニケーション能力があるということは、自分 自身が持っている意見をただ単に通すとい うことではありません。相手の考え方を知 ろうと努力し、理解した上でどうするか考え 実行する事ができる人こそ国際人だと私は 思います。留学とは、そういった経験を手に する機会が持てるということです。

シドニーの留学業界変遷

――シドニーにおける留学業界の変遷をど のように見られていますか。

大橋:オーストラリアの留学エージェント の勢いがすごかったのは1997、98年ごろ かと思います。その時に活躍していたエー ジェントの特徴は「留学生のサポート・セ ンター」という役割。来豪した人たちに対 して学校や銀行口座の開設、携帯電話、 PCなどのサポートがメインで、まずはオ フィスに来て頂くという形が多かったので はないかと思います。恐らく今はそういう 形を取っているエージェントは少ないと思 います。その背景として、当時はそういう場 所に行かなければ情報が得られませんで した。そこで情報を得たり、友達ができた り、さまざまなイベントを計画していまし たね。現在は、情報が簡単に得られるよう になったことで直接留学エージェントのオ フィスに行く必要がなくなりました。それ が目に見える大きな変化の1つであると感 じます。

諸澤:この数年間の中でまだ大きく感じる ことはありませんが、個人的には、今後語 学ができるというスキルだけでは十分では

なくなると考えています。それを踏まえて実 際に自社が行っている取り組みとしては、 オーストラリア国内の日本人へのコミュニ ティーの提供、交流の場を作ることです。 ビジネスやデザインなど、何かに特化した コミュニティーを作っていくという取り組み をしています。自分の興味を持った分野を 広げていくお手伝いができればと考えてお り、そこが今後変わっていくことの1つであ ると思いますね。

大橋:本当にそうですね。今までそういう のはなかったですからね。今そういった仕 掛けを留学エージェントが行っているとい うのは、これもまた新たな変化ですよね。 諸澤: 将来のキャリアに向けたスキルを 学ぶ場を提供するというのは、新しいエー ジェントの形だと思います。留学前の情報 収集がインターネットで対応でき時間も省 ける分、オーストラリア国内でできること の可能性は更に広がっていきます。その可 能性に向けてサービスを提供していくこと が、留学エージェントとして面白い変革に なるのではないかと思います。

――留学生のサポートを行うだけではなく なりつつあるということですね。では、今 後求められる留学エージェントの役割とは 何でしょうか。

諸澤:スマートフォンの時代になってきて 物事をネットで検索する人たちがほとんど である今、留学に来る人たちがどういった 分野に興味・関心を持っているか把握で きるようになっています。私たち留学エー ジェントも、留学生たちが欲しい情報を 発信できるような場所、プラットフォーム を作っていく必要性があると思います。コ ミュニティーや勉強会、セミナーなどに参 加して、楽しいだけの留学生活で終わらせ ずに、本当に成果を得る体験にして欲しい ですね。その目的に特化したサービスをし ていくことが今後必要となっていくと思い

考える力が以前よりも劣るような気がして います。だからそういう場所の提供が必 要なんだと思いますね。実際、自分の力 で考えなさいと思うのですが。自分の目標 に向かって留学をどのように生かすのか をしつかりと考えて欲しいと思います。もち ろん手助けは必要ですが、目的意識や自 分で判断する人間力、力強さを持ってい る人はすごく少なくなってきている気がし ます。

先ほどの変遷につながるかもしれません が、自分自身がワーキング・ホリデーの世代 だった当時は本当に貧乏でお金がなく親 の援助もない中、何とか1年かじりついてや ろうという気持ちの人が多かった。しかし 今は旅行の延長で来ている人が多いです。 それを悪いとは思いませんが、今後の人生 に向けた意識付けは目的意識を持ってい る人とそうでない人の間ですごく差がある のではないかと思います。ただ、留学という 環境自体は、それに気付ける場でもある。 だからこそ、諸澤さんが言っていた機会を 与えてあげるというのは大切です。もっとた くさんの壁にぶつかって、人間力を高めて 欲しいですね。

諸澤:どこに行っても楽しめる人たちって いるじゃないですか。そういったどこの国に 行っても自分の世界を築くことができたり とか、楽しいことを見つけることができる人 が今は少ないと思います。自分自身も若い 世代ではありますが、それでも感じること が多いですね。ハングリー精神とかは、自 分の環境を変えないと難しいと思います。 だからこそ、どこでも楽しめる力やハング リー精神を持つということは、海外だから こそ培える力です。ハングリー精神を持て る機会の1つが海外、そして留学だと思い ます。こっちで苦労はした方が良いのでは ないでしょうか

大橋:本当にそうです。情報が氾濫してい ることには、良い面もあり悪い面もありま す。そこで何をするのかを考えることです 大橋:少し話はそれますが、今の若者は ね。日本人は守られて育ってきました。人

間的な力強さや、個人で意見を発すると いったことが少ない。それに対して海外の 人は個人主義や、自分で考えて何かをして いくといった教育を受けて育ってきている 人がほとんど。幼稚園の時くらいからプレ ゼンをやっているくらいですから。

日本人は今後、日本だけでなく国際社 会で生活をしていかなければならない。そ こでうまくやっていくためには、日本から 発信できる人材が不可欠です。これから の留学はそういった人材を育てていくた めの、僕らは水先案内人みたいな形で、 そういう場の提供やプラン立てを提案・提 供したい。こういったものがあるということ を、プロから伝えてあげることと、次世代 を担う若者たちが国際舞台で活躍できる ようサポートすることができれば良いと思 います。

――最後に読者の皆様に、ひと言ずつお願 いします。

諸澤: 留学業界とは、人が成長する場所だ と思っています。留学を経験して何かを身 に着け、世界で活躍するためには、やはり 世界を知らないといけません。オーストラリ アという国は、ビザの面でも、仕事の面で もすごく条件が良い所だと思います。フィリ ピンにおいても、英語を短期間で集中して 学べたり、開発途上国の文化を体験でき ます。留学はきっかけ作りであり、スキルと 経験を積んでいく場所です。留学を経験す ることによって、その先の長い人生の中で 幅が広がっていく。その先のビジョンを見 据えた上で、留学生が多く来ることを私た ちは望んでいます。

大橋:留学の理由も人それぞれでしょう し、いろいろな目的で来て問題ないと思い ます。ただ、もし来るのであれば、諸澤さん が言うような先のビジョンを持った上で、 この留学を生かすというように利用して欲 しいです。広い意味で言えば、好きなもの を見つけて欲しい、それがその後の人生に も生かされていくような気がします。



